

児童作文コンクール受賞作品における書き出しと結びの分析

加藤恵梨 (愛知教育大学)

1. はじめに

本研究の目的は、2018年度から2021年度までの「清流環境作文コンクール」受賞作品において、書き出しと結びがどのように記述されているのかを明らかにすることである。また、受賞作品とそれ以外の応募作品の書き出しと結びの違いがあるのかについても考察する。なお本研究では、書き出しを作文の冒頭の1文とする。同様に、結びについても作文の最後の1文とする。

2. 先行研究の記述

書き出しは児童にとって難しいものであるが、文章全体に関わる重要なものであることが指摘されている(太田, 1965; 櫻本, 1996; 田近・井上・中村(編), 2018; 橋本, 2019)。加藤(2022)は2019年度の「清流環境作文コンクール」応募作品のイタイイタイ病について書かれている作文のうち、2年生, 4年生, 6年生が書いた470編を調査し、児童が書き出しおよび結びにどのような形式や内容を用いているのかを分析している。書き出しは太田(1965)をもとに次の表1のように7つに、結びは次の表2のように8つに大別している。

表1 加藤(2022)の書き出しの種類

大分類	中分類	例
1. 人物的発想	自己中心的発想	私はイタイイタイ病について調べました。
	人物中心の発想	みなさんは「イタイイタイ病」を知っていますか。
	共同体的な発想	私たちはとてもめぐまれていると思います。
2. 日・時的発想	特定な時から	きょう、イタイイタイびょうしりょうかんに行きました。
	不特定な時から	昔、この富山市婦中町にある神通川にカドミウムというものがたくさんふくんで流れてきました。
3. 場所的発想	場所から	富山県は、水がきれいでおいしいです。
	場面から	社会の授業で四大公害病について勉強しました。
4. テーマからの発想	テーマから	イタイイタイ病は、神通川の上流から流れてきたカドミウムが原因の病気だ。
	テーマに関連する事物から	公害病を二度と起こしたくない。
5. 事象・状態からの発想		ここに一枚の写真があります。
6. 心理状態からの発想		「今、起こったらどうなってしまうのだろう・・・」
7. 抽象的な説明からの発想		真実を真実として伝えていくことがぼくたちの使命だと思う。

表2 加藤(2022)の結びの種類

分類	例
1. 願望	水をムダづかいせずに、大切につかいたいと思いました。
2. 意志	神通川はこれからもきれいな川で、そして、イタイイタイ病をわすれないようにします。
3. 意見・主張	これからもきれいな水が飲めるように一人一人努力しなければいけないと思いました。
4. 感じたこと・思ったこと	イタイイタイ病のことを知り、自然の大切さが学べてよかったです。
5. 考え	二度と公害を繰り返さず美しく豊かな環境を未来に引き継ぐこと、それが私たちの使命だと思いました。
6. 事象の説明	この工事は二千十二年に終わりました。
7. 前で述べたことのまとめ	これがぼくが出した答えです。
8. 読み手への呼びかけ	みなさんも、この先イタイイタイ病を起こさない、ちょっとした気づかいを心がけましょう。

その上で、2年生は過去の経験・行動・見聞によって文章を書き始め、今後の行動について述べて文章を終えることが多い、4年生は過去の経験・行動・見聞などの身近なことから出発し、発展的な内容で文章を終えているものが多い、6年生は考え・思いから文章を書き始め、考え・思いを述べて文章を締めくくっているものが多いと指摘している。

3. 「清流環境作文コンクール」受賞作品の分析

3.1 「清流環境作文コンクール」受賞作品について

本研究では、第1回(2018年度)、第2回(2019年度)、第3回(2020年度)、第4回(2021年度)の(A)清流環境歴史賞(イタイイタイ病に関する内容、以下歴史賞)、(B)清流環境体験賞(自然・環境に関する内容、以下体験賞)、(C)清流環境科学賞(生き物・命に関する内容、以下科学賞)を受賞した164編(第1回32編、第2回47編、第3回34編、第4回51編)を調査対象とする。なお、賞には最優秀賞、優秀賞、佳作があるが、すべて受賞作品として扱う。

3.2 書き出しの分析

3.2.1 書き出しの類型

加藤(2022)の分類をもとに、受賞作品の書き出しを分類したものが次の表3である。加藤(2022)の7つの大分類に、今回の分析で新たに見られた「8. 会話からの発想」「9. 読み手への呼びかけ」「10. 行動からの発想」を加えた。

表3 第1回から第4回までの受賞作品における書き出しの類型

大分類	中分類	1・2年生			3・4年生			5・6年生		
		歴史賞	体験賞	科学賞	歴史賞	体験賞	科学賞	歴史賞	体験賞	科学賞
1. 人物的発想	自己中心的発想	5 (71%)	13 (72%)	5 (26%)	5 (36%)	7 (30%)	9 (41%)	13 (52%)	6 (33%)	7 (39%)
	人物中心の発想	0	0	2 (11%)	0	0	1 (5%)	1 (4%)	0	0
	共同体的な発想	0	1 (6%)	0	0	0	1 (5%)	1 (4%)	0	0
2. 日・時的発想	特定な時から	0	1 (6%)	3 (16%)	2 (14%)	4 (17%)	0	1 (4%)	3 (17%)	5 (28%)
	不特定な時から	0	0	0	2 (14%)	0	0	0	0	0
3. 場所的発想	場所から	0	2 (11%)	2 (11%)	0	6 (26%)	3 (14%)	1 (4%)	4 (22%)	1 (6%)
	場面から	0	0	0	0	1 (4%)	0	0	0	0
4. テーマからの発想	テーマから	0	0	0	2 (14%)	0	0	1 (4%)	0	0
	テーマに関連する 事物から	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5. 事象・状態からの 発想		0	0	1 (5%)	2 (14%)	2 (9%)	0	1 (4%)	2 (11%)	1 (6%)
6. 心理状態からの発想		1 (14%)	0	1 (5%)	0	1 (4%)	1 (5%)	4 (16%)	1 (6%)	2 (11%)
7. 抽象的な説明からの 発想		0	0	0	0	0	3 (14%)	0	0	0
8. 会話からの発想		1 (14%)	1 (6%)	4 (21%)	1 (7%)	2 (9%)	3 (14%)	0	1 (6%)	0
9. 読み手への呼びかけ		0	0	1 (5%)	0	0	0	2 (8%)	0	1 (6%)
10. 行動からの発想		0	0	0	0	0	1 (5%)	0	1 (6%)	1 (6%)
合計		7	18	19	14	23	22	25	18	18

3.2.2 1・2年生（低学年部門）の特徴

最も多く用いられているのは、「1. 人物的発想」の「自己中心的発想」である。その点は応募作品と同じであるが、受賞作品では次の(1)のような記述が見られる。

(1) わたしは、イタイイタイびょうしりょうかんについて、イタイイタイびょうのことをはじめてしました。

(第3回歴史賞, 1年生)

受賞作品では、「わたしは、イタイイタイびょうしりょうかんにいった」のように過去の経験・行動・見聞だけではなく、「イタイイタイびょうのことをはじめてしました」のように過去の経験・行動・見聞によって何を発見したかなどについても書かれているものが多い。その点が自身の過去の経験・行動・見聞のみが書かれているものが多い応募作品と異なっている。また科学賞受賞作品では、次の(2)のように、「8. 会話からの発想」が多く用いられている。そのことにより、実体験から筆者が自然・環境の何を問題であると感じているのかが読者に伝わりやすいと言える。

(2) 「わあ、こんなものまですててある。」 (第1回科学賞, 1年生)

3.2.3 3・4年生（中学年部門）の特徴

最も多く用いられているのは1・2年生同様、「1. 人物的発想」の「自己中心的発想」であるが、受賞作品では「ぼくは、富山県にあったイタイイタイ病が、どんな病気か知りたかったから調べました」のように自身の思いを書いている点が、身近なことから書き始めているものが多い応募作品と異なっている。また体験賞受賞作品では、「3. 場所発想」が多く使われている。2年生が書いた次の(3)と比べ、3・4年生では次の(4)のように場所について詳細に説明しているものが多い。

(3) ぼくのおばあちゃんの家は、八尾のにん歩にあります。 (第1回体験賞, 2年生)

(4) 私の住んでいる富山県には、自まんしたいきれいな緑がたくさんあります。 (第2回体験賞, 4年生)

3.2.4 5・6年生（高学年部門）の特徴

多用されているのはやはり「1. 人物的発想」だが、次の(5)のように「9. 読み手への呼びかけ」も見られる。

(5) みなさんは、イタイイタイ病を知っていますか？ (第3回歴史賞, 5年生)

また、「6. 心理状態からの発想」から書き始められているものには、次の(6)のように決意を述べるような文が見られる。

(6) もう、こんなにおそろしい病気は二度とはやらせてはいけない。 (第3回体験賞, 6年生)

3.3 結びの分析

3.3.1 結びの種類

加藤(2022)の分類をもとに、受賞作品の結びを分類したのが次の表4である。加藤(2022)の8つの分類に加え、今回の分析で新たに見られた「9. 行動」を加え、9つに分類した。

表4 第1回から第4回までの受賞作品における結びの種類

分類	1・2年生			3・4年生			5・6年生		
	歴史	体験	科学	歴史	体験	科学	歴史	体験	科学
1. 願望	4 (57%)	5 (28%)	10 (53%)	8 (57%)	13 (57%)	13 (59%)	15 (60%)	13 (72%)	15 (83%)
2. 意志	0	1 (6%)	4 (21%)	1 (7%)	1 (4%)	1 (5%)	2 (8%)	0	0
3. 意見・主張	1 (14%)	0	0	2 (14%)	1 (4%)	0	4 (16%)	1 (6%)	1 (6%)
4. 感じたこと・思ったこと	2 (29%)	8 (44%)	5 (26%)	2 (14%)	5 (22%)	3 (14%)	0	1 (6%)	0
5. 考え	0	2 (11%)	0	1 (7%)	3 (13%)	5 (23%)	2 (8%)	3 (17%)	2 (11%)
6. 事象の説明	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7. 前で述べたことのまとめ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8. 読み手への呼びかけ	0	1 (6%)	0	0	0	0	2 (8%)	0	0
9. 行動	0	1 (6%)	0	0	0	0	0	0	0
合計	7	18	19	14	23	22	25	18	18

3.3.2 1・2年生（低学年部門）の特徴

体験賞受賞作品では「4. 感じたこと・思ったこと」が最も多いが、全体において「1. 願望」が多く使われている。受賞作品では次の(7)のように、低学年であっても自身を含めた共同体による願望を述べているものが多く、自身の今度の行動について述べて文章を終えている応募作品よりも広い視野で物事を捉えていると考えられる。

(7) あんぜんなごはんを、おなかいっぱい食べられるように、みんなでしぜんをまもっていきたくです。

(第4回歴史賞, 1年生)

また「4. 感じたこと・思ったこと」を述べているものについても、応募作品では「良かった」と表現されているものが多いが、受賞作品では次の(8)のように比喩的な表現を用いて自身の感情を示しているものが見られる。

(8) きれいになったうみは、うれしそうにみえました。(第3回体験賞, 1年生)

3.3.3 3・4年生（中学年部門）の特徴

最も多く用いられているのは「1. 願望」である。応募作品では実現することが難しそうな願望を書いているものが多いが、受賞作品では次の(9)のように実現可能性が高い願望を述べているものが見られる。

(9) こうして調べてわかったことから、わたしは水がとても大切だということを知り、これからは、水をむだづかいせず大切にしたいと思います。(第2回歴史賞, 4年生)

また、次の(10)のように「5. 考え」について述べているものも多い。

(10) このように、わたしたちの生活を守ってくれている水の性質についてよく知ることで、水を上手に生活に役立てながら、生きていくことが大事だと思いました。(第3回体験賞, 4年生)

3.3.4 5・6年生（高学年部門）の特徴

最も多く用いられているのはやはり「1. 願望」である。受賞作品には、次の(11)のように具体的な目標をあげ、それを達成するための今後の抱負が述べられているものが見られる。

(11) 学校や家でも、かんきょうについてよびかけていって、いつか、ゴミゼロの地いき、ゴミゼロの自然、ゴミゼロの射水市、ゴミゼロの富山県、ゴミゼロの日本になるように、がんばっていきたくと思います。

(第2回体験賞, 5年生)

また、応募作品では「～たくです」という表現で願望を示しているものが多いが、受賞作品では次の(12)のように「願っています」という表現が多く用いられている。

(12) この方法が実現させて、未来の海が、「きれいで美しい海」になることを、私は願っています。

(第2回科学賞, 6年生)

さらに、「3. 意見・主張」も多く見られ、(13)のように今後我々がどうすべきかについての考えが述べられている。

(13) どちらの行動を選ぶか、一人一人が考えていく必要があると思います。(第4回体験賞, 5年生)

加えて、受賞作品は書き出しと結びの内容が一貫しており、書き出しと結びを読めば文章の意図が推察できるものが多い。例えば、書き出しが「私は、五年生の時に社会科の授業でイタイタイ病の学習をしました」であると、結びは「努力をすることが一番大切だと、イタイタイ病の調べ学習を通して学びました」のように、学習を通して学んだことを述べて文章を締めくくっている。自身の思いを書くだけではなく、文章全体の統一感も考えられている点が応募作品と異なっている。

4. おわりに

受賞作品には書き出しを読めばそれ以降に書かれている内容が予想できるものが多い。また、結びにおいては単に願望を述べるのではなく、今度どうしたら良いかなど具体的な考えや意見を記述しているものが多いことが分かった。

謝辞 本研究は、科研費基盤研究(B)「コンクール応募作文を資料とした児童の文章作文能力の評価と発達段階の包括的研究」(2020年-2024年、代表者：宮城信)による成果の一部です。

参考文献

- 太田康治 (1965). 作文指導 その反省と考察—書き出し文による発想の類型及びその傾向について— 教育実践研究集録 / 新潟県立教育センター, 2, 9-14.
- 加藤恵梨 (2022). 児童作文における書き出しと結びの分析 言語資源ワークショップ 2022
- 櫻本明美 (1996). 説明的表現の指導—書き出しの工夫に着目して— 神戸親和女子大学研究論叢, 30, 400-422.
- 田近洵一・井上尚美・中村和弘 (編) (2018). 国語教育指導用語辞典 第五版 教育出版
- 橋本慎也 (2019). 子どもがどんどん書きたくなる! 作文テクニック&アイデア集 明治図書出版